

# ガーナ

## 1996年第四共和制第二回総選挙

本田俊一郎 ■

1996年12月7日、ガーナ第四共和制第二回の大統領選挙と国会議員選挙が同日に実施され、大きな混乱もなく成功のうちに終了した。この選挙の成功はまたガーナにとって独立以来初めて、一つの民主政権がその任期を全うし、さらに国民が次期政権を投票を通じて選ぶことに成功した記念すべき瞬間ともなった。以下はその選挙報告である。

### 1 選挙への道程

選挙への道程は、まず1992年の第一回選挙において、大統領選で勝利したローリングス側の選挙不正行為を理由に、敗北した野党各党が国会議員選挙をボイコットして幕を開けた。これによりローリングス率いる国家民主会議(NDC)が議席をほぼ独占し、事実上一党体制を形成する一方、野党はその政治活動を議会外に限ることとなった。

民政移管後の政治環境は、ローリングス政権が政策決定における主導権を握ったことで特徴づけられる一方、活発化する新聞報道等民主化でより自由な政治環境ができつつあることもまた事実であり、ローリングス政権は野党の政治活動に対してこれまで以上に慎重な対応を迫られることとなった。1995年3月政府が付加価値税(VAT)を導

入したことを一つの契機としてアクラ等主要都市で野党各党の若手有力者が断行した政府批判デモと、その後6月の政府によるVATの取り下げはその一つの例であろう。

1993年8月、ローリングスはアフアリ・ジャンを委員長として新たに選挙管理委員会を発足させた。まず95年10月に同委員会は、選挙へ向けた本格的な仕事として、前回の野党のボイコットの原因ともなって評判の悪かったこれまでの有権者登録を全く新たにやり直した。96年4月には、各登録センターに完成した登録リストを掲示、有権者による登録リストの再確認・訂正の機会を設けて公正を期した。

1995年後半から96年にかけて、与党と野党の選挙へ向けた駆け引きは次第に本格化する。ローリングスとNDCが与党として有利に選挙戦を進めようとする一方、野党は強力な与党に対抗すべく野党各党の連立・同盟を模索した。

NDC側は、イーグル党等の小政党と“Progressive Alliance”(進歩のための同盟)の下に連立を組む形は取るものの、第二回選挙を事実上NDC単独で戦うことになった。9月のNDCの総会にてローリングスが順当に大統領候補となり、副大統領候補には、多くの予想に反して無名のミルズ元国税局長

官が指名された。

ローリングス政権はこの時期、反政府系新聞による政権与党内の汚職疑惑告発等により数度にわたって揺さぶられることとなる。しかしローリングスは、人権および行政における公正諮問委員会(CHRAJ)に政権要人の疑惑捜査を指示して政権内部の浄化を断行、また後述する野党の混迷にも助けられて、それら事件のNDC政権への影響は最小限に食い止められたと言える。ローリングスは、「統一、安定、開発」をスローガンに精力的に国内各地を回り、農村電化計画等これまでの開発事業の実績とその継続の必要性を国民に広く訴えた。

一方野党は、リーマン率いる人民国民会議(PNC)が独自の大統領候補に固執したため野党全ての連立には失敗したが、8月になってようやく新愛国党(NPP)と国民会議党(PCP)が「大同盟」(Great Alliance)の名称で連立を組むことに合意した。ガーナ最大の民族であるアシャンティ人に強い支持基盤を置き、政策的にはグンカ・ブシア以来の資本主義政党であるNPPと、エンクルマの会議人民党(CPP)の社会主義的政策を引き継ぐPCPの両党はこれまで伝統的にライバルと見なされてきたが、政権与党として優位に立つローリングスとNDCの打倒を至上命題にあえて連立を組んだ。

大同盟は、大統領選挙の布陣として、1996年4月のNPP党大会でボアヘン前大統領候補を破ってNPP候補となったクフォーを大統領候補、副大統領候補には、ローリングス政権の副大統領であったNCPのアーカーを据えた。NCPは前回選挙ではNDCと連立していた小政党であるが、政権内部で圧倒的な力を持つNDCから正当な扱いを受けていないとして95年半ばに政権を離脱していた。一方、PNCは大統領候補としてマハマを選び選挙体制を整えたが、NDCおよび大同盟に比して弱小であり劣勢は免れ得なかった。

有能な政治家として評価の高いクフォーが候補となったことで大同盟への期待が高まったが、大同盟の内部はその後も力で勝るNPPと、NPPに主導権を握らせまいと抵抗するPCPの争いに終始した。国会議員統一候補の議席配分では11月に入っても決着がつかずに両党間で非難の応酬が続いた。

このような自陣の混迷の間も、クフォーは国内各地を回って、より良い経済運営と国民の真の和解を実現するためには「票を通じた政権の交替」が必要であると訴えた。しかし、「和解」や「交替」を掲げるクフォーの選挙公約は、実績に基づいたローリングスの公約に比べて具体性に欠けるのは否めなかった。

## 2 投票と開票の風景

国会議員選挙が大統領選挙の1カ月後に実施された前回総選挙と違い、今次選挙においては大統領選と国会議員選挙の投票は同日に実施された。選挙委員会は、日本政府をはじめとする海外からの協力を得ながら、前回総選挙の反省に立って選挙システムに多くの改善を施した。投票の屋外での実施や透明な投票箱の使用等、投票と開票における不正はきわめて難しい選挙システムが出来上がったと言える。

選挙に先立つ数カ月の間、与党と野党の支持者が衝突する事件が数件あり開票前後の混乱が心配されたが、選挙委員会の努力もあり投票および開票は驚くほど平和裡にそして静かに進んだ。また投票率が独立以来最高の79%を記録したことが発表される等、国民の選挙への意識の高さが窺われた。

選挙委員会は公式結果の発表を投票終了後3日以内に行なう旨選挙前に公約していたが、通信網の混乱等が原因で発表が遅れ、12月12日になって

1996年大統領・国会議員選挙結果

	大統領選挙得票率 (%)			国会議員選挙 (議席数)			
	ローリングス	クフォー	マハマ	NDC	NPP	PCP	PNC
西部	57.3 (60.7)	40.9 (22.8)	1.8	12	3	4	
中央	55.7 (66.5)	42.9 (26.0)	1.4	14	3	—	—
大アクラ	54.0 (53.4)	43.3 (37.0)	2.7	13	9	—	—
ヴォルタ	94.4 (93.2)	4.8 ( 3.6)	0.8	17	—	—	
東部	53.8 (56.7)	45.0 (38.5)	1.2	15	11	—	—
アシャンティ	32.8 (32.9)	65.8 (60.5)	1.4	5	27	—	—
ブロング・アハフォ	61.7 (61.9)	36.0 (29.5)	2.3	17	4	—	—
北部	62.1 (63.0)	32.0 (16.3)	5.9	18	3	1	1
アッパー・ウエスト	69.0 (54.0)	17.4 ( 8.9)	13.7	8	—	—	—
アッパー・イースト	74.6 (58.3)	11.2 (10.5)	14.2	12	—	—	—
総 計 (議席総数199)	57.2 (58.4)	39.9 (30.3)	3.0	133	60	5	1

(注) (1) カッコ内の数値はそれぞれ前回選挙におけるローリングスとNPPのボアヘン候補の得票率。

(2) アシャンティ州の一選挙区で選挙が延期されているため現在の総議席数は199議席となっている。

(出所) Electoral Commission.

ようやく、2 選挙区を除く198選挙区の結果を公表、大統領選でのローリングスの勝利と、国会議員選挙でNDCが過半数を大きく超える133議席を獲得したことが明らかになった。他方、野党は野党第一党となったNPPの60議席を含め併せて66議席に止まった。

投票翌日には英連邦選挙監視団等は概ね自由かつ公正に選挙が実施されたと評価する旨声明を出した。最終結果発表後、敗北した野党も選挙結果を厳粛に受入れると同時にローリングスの勝利を称える旨すみやかに発表した。

### 3 選挙結果

大統領・国会議員選挙結果を、前回1992年選挙のときの結果と比較しながら分析してみよう。ク

フォーは全ての州で前回選挙のNPPのボアヘン候補より得票率を伸ばしているが、ローリングスの得票率はわずか1ポイント程度落ちただけであり、クフォーの得票率の増加は連立することによって野党支持票をとり纏めた傾向が強い。

州レベルでの投票傾向で注目すべき変化としては、アッパー・イースト州およびアッパー・ウエスト州でローリングスが、両州で健闘が予想されたPNCを押さえて躍進し、両州の国会議員選挙ではNDCが議席を独占したことである。これはローリングス政権が両州で多くの開発の実績を積み上げてきたことが理由と考えられる。

今次選挙の得票率では、前回選挙同様の二つの傾向が看取された。第1点はローリングスとNDCがローリングスの母方の民族であるエウエ人が多く住むヴォルタ州で圧倒的な支持を集めた一方、

クフォーとNPPが党の伝統的支持基盤であるアシャンティ州で力を発揮したことがある。なお、ローリングスとNDCはヴォルタ州以外の各州でも万遍なく票を獲得しており、ローリングスの勝利は民族ファクターだけで説明できないのは明らかである。第2にNDCがアシャンティ州を除く他州における農村部でNPPを圧倒、他方NPPは州都等主要都市部の選挙区で力を発揮したことである。ローリングス政権が、構造調整政策を継続して農村に有利な交易条件を維持する一方、農村部重視のポピュリスト的開発プログラムもこれまで通り精力的に実施して人口で多数を占める農村部の根強い支持を得たことが、ローリングスとNDCの勝利を確実なものにした。

### おわりに

今次選挙の成功で、当国の民主政治がゆっくりではあるがしかし着実に進展していることを示し

た。これまでNDC一党体制であった国会においても、少数派ながら野党が66議席を送り込んだことで、議会制民主主義の体裁が整ってきた。

しかし今次選挙に勝利した第二次ローリングス政権は、その前途には解決すべきいくつかの課題が控えている。特に経済面においては、長引く構造調整プログラムから、マクロ経済の安定だけに止まらないより具体的な成果を引き出さねばならない段階に入ってきている。政治面においても、憲法が大統領の3選を禁じていることから、後任の大統領候補選りも含めローリングスの党とも言うべきNDCの体制改革という課題が控えている。

受益国の民主主義の進展が構造調整政策支援の一種のコンディショナリティとなりつつある現在、ガーナにとり民主主義の後戻りは許されない。いかにローリングスが上述したような多くの課題を乗り越えていくのか、第四共和制第三回選挙への道程は目を離せないきわめて重要な4年間となる。

(ほんだ・しゅんいちろう／在ガーナ日本大使館専門調査員)